

## 北海道でZ-GIS の新しい利用が始まっています！

### 北海道のスマート農業事情

北海道では、JAを中心に、航空写真をもとにした圃場のポリゴンデータや、GPSロガーを使った圃場の栽培品目データを活用したスマート農業が進んでいます。しかし、システムのほとんどがJA専用であり、個々の農家がそのデータを活用できる状態ではありません。そこで、データ活用を進めるため、いくつかのJAがZ-GISの導入を進めています。

### 畑作で使えるZ-GIS

あるJAでは、農家にGPSロガーを渡し、その年栽培する圃場をSHPファイルとして直接登録してポリゴンデータとして活用しています。年度ごとに栽培範囲が変わる、ビート・馬鈴薯などは、年度ごとの登録が必要です。現在、このSHPファイルは農協でのみ閲覧が可能ですが、農家もデータが活用できるようZ-GIS導入を検討しています。SHPファイルからZ-GISに読み取り可能な状態に変換したデータを、農家がZ-GISを通じて見ることができれば、Excelによる栽培履歴の記入も簡素化でき、より使いやすいデータとなります。

他社システムと比較検討した結果、年間の利用料が安価で、JAと全組合員がサービスを活用しても無理のない料金であるところが決め手になったとのことでした。



### 草地管理でも生きるZ-GIS

別のJAでは、圃場を利用する生産品目が酪畜向けの飼料作物（デントコーン・牧草）のみで、TMR（混合飼料）センターやコントラクター（酪畜の規模拡大に対応するため草地管理・飼料収穫などの作業を専任でおこなう仕組みのこと、これにより農家は飼育に専念できる）の利用が進んでいます。JAがコントラクターを組織し、作業指示もおこないます。その際、農家の圃場管理のため、航空写真からポリゴンを登録して活用していますが、現在は印刷した情報をもとに指示するだけです。



そこで、Z-GISを導入してスマートデバイスでコントラクターに指示（刈る作業・刻む作業・場所の確認など）するなど効率化を進めようとしています。本州のJAでおこなわれるヘリ防除の作業と同じく、スマートデバイスを使用することで、自分の場所が特定でき、対象圃場の確認が容易にできるので、目印が少ない農地での作業場所確定に役立ちます。

加えて、作業終了報告などもZ-GISを通じて行うため、よりスマートに作業受委託ができるということです。

水稻圃場での利用が多いZ-GISですが、北海道では畑作や草地管理でもZ-GISの活用が始まっています。